様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月　１７日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０１３３
研究課題名（和文）　『源平闘諍録』を基軸とした古代中世東国をめぐる軍記文学の基礎的研究
研究課題名（英文）　The fundamental study on the war tale about eastern district of the ancient and the medieval period mainly on “Genpei-tojouku”.

研究代表者
高山　利弘　（TAKAYAMA TOSHIHIRO）
群馬大学・社会情報学部・教授
研究者番号：７０１９７２１８

研究成果の概要（和文）:『源平闘諍録』は、数多い『平家物語』のテキストの中で、東国に関わる叙述内容を持ち、成立時期が比較的古いとされている。しかし、これまで研究対象としてとりあげられる機会が少なく、このテキストをめぐる研究は停滞した状況にあった。本研究は、この特異なテキストについて、必要な注釈作業を行い、このテキストの特質を明らかにし、このテキストにおける東国をめぐる問題の一端を明らかにしたものである。

研究成果の概要(英文):"Genpei-tojoroku" has contents about eastern district in the variant texts of "Heike-Monogatari", and it is said that the formation time is comparatively old. However, there were not many opportunities to become the object of the study. And the study about this text was delayed. This study performed necessary text interpretation about this peculiar text and clarified the characteristic of this text , and solved part of the problem of this text relating to eastern district.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：日本文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：軍記文学、異本、東国圏

１．研究開始当初の背景

近時の『平家物語』研究は、その一異本「延慶本」に多くの研究者の関心が向けられ、古態本として位置付けられてきたこのテキストにさまざまな改編の手が加えられている　ことなど、新たな問題点の指摘とその解明がなされてきた。一方、同じく『平家物語』の一異本『源平闘諍録』は、従来から早川厚一・真野須美子らを中心に少数の研究者が研究対象としてきたにとどまり、近年は、その成立時期が比較的古いと目されながらも、『源平闘諍録』が研究対象として正面からとり上げられる機会も少なく、このテキストをめぐる研究は停滞した状況にあったといえる。

このような文学研究の分野における研究の停滞に対して、歴史学研究の分野では、千葉氏研究において、このテキストの成立時期および成立背景をめぐる成果があった。すなわち、『源平闘諍録』は、源頼朝側近であった千葉常胤以降の千葉氏周辺において成立したという論が通説となっているが、福田豊彦・野口実による千葉氏の嫡宗家問題や妙見信仰に課題を設定し、『源平闘諍録』の成立時期および成立背景についての具体的な考察がなされたのである。両氏の見解には相違する点はあるものの、歴史学研究の側からこのテキストの重要性を提示した意義は大きい。歴史学研究における今後の研究の進展が俟たれるが、その一方で、近時の軍記文学研究が、これら歴史学研究の成果に多くを依存しているのも事実である。

また、文庫版テキストの上梓（講談社学術文庫『源平闘諍録 上・下』服部幸造・福田豊彦、1999・2000）は、軍記文学と歴史学の共同研究の成果として画期的であったが、注釈成果としては歴史学研究に沿ったものとなっており、また、現在では再検討されつつある延慶本本文の先行が前提とされている等の問題もある。そのため、『源平闘諍録』をめぐっては、異本本文の校勘をふまえた軍記文学研究としての検討の余地が残されているといえるのである。

２．研究の目的

現在の『源平闘諍録』研究で求められているのは、特定の学術領域的な関心に偏らない、このテキストをめぐる総合的な研究であるといえる。それが十分に果たされてこなかった研究史的な反省と、本研究の成果が地域文化研究への寄与を目指すことをもって、本研究の目的とする。

異本本文との校合による『源平闘諍録』本文の特質を明らかにした上で、歴史学研究・国文学研究に偏らない問題点の析出と、その検討に必要な注釈作業を通して、『源平闘諍録』における〈東国〉をめぐる問題点を明らかにする。

特に、この作品をめぐる歴史学の成果、とりわけ〈地方史研究〉への目配りの重要性については、対象テキストそのものに有される「坂東」の地の地域性に関わって、中世文学における「東国」をめぐる独創的な問題を考える機会とするものである。

従来論じられることの少なかったこの作品の〈全体像〉の解明を目指すことによって、『平家物語』諸伝本間における『源平闘諍録』の位置を明らかすることにある。

３．研究の方法

(1)注釈作業による問題点の析出

『源平闘諍録』全本文を 20 ブロックに分かち、この共同研究の構成メンバー（研究協力者も含む）が適宜分担し、担当ブロックにおける問題点の指摘およびその問題解決に必要な注釈作業を行う。月例研究会を延べ 20 回開催し、担当箇所における注釈作業の成果発表および共同討議を実施する。なお、この月例研究会は、本研究が科研として採択されるに先立ち、平成 17 年度から開始されているものである。

(2)基礎資料文献調査および実地踏査

上記の問題点の析出作業と並行して、『源平闘諍録』原本（内閣文庫、現・国立公文書館蔵）の書誌的な確認作業を行う。また、従来から問題となっている『神代本千葉系図』『千葉大系図』等の千葉氏関係系図の調査・検討を行う。また、注釈作業の過程で、実地踏査の必要が生じた場合には、適宜実施する。

(3)問題点の整理と討議

『源平闘諍録』全本文の注釈作業によって析出された問題点について、引き続き月例研究会を開催し、研究発表と討議を行うこととし、延べ 13 回の月例研究会を開催した。

(4)外部研究者の招聘による研究会の開催

『源平闘諍録』において研究成果の蓄積がある外部研究者との研究交流を実施する。平成 20 年度に、早川厚一（名古屋学院大学教授）・源健一郎（四天王寺大学准教授）の両氏を講師として月例研究会に招聘し、共同討議を行った。

(5)研究成果報告書の作成

メンバーが担当した個別課題に関して、論文化の作業を行い、逐次公表するとともに、最終年度には研究成果報告書の作成し、関係する研究者への配布を以て、研究成果を公表する。

４．研究成果

(1)近世における『闘諍録』本文の伝来について

『源平闘諍録』の成立の〈場〉が「東国」にあったことは、独自の本文内容からほぼ動かないといえるが、現存『闘諍録』が内閣文庫に収蔵される以前の、江戸幕府の紅葉山文庫においては、その書名が「源平闘爭録」誤記されていることや、『平家物語』の異本として分類されていないことなどから、この書が広く認知されていたわけではないことがうかがえる。また、『御書物方日記』によれば、天明６年(1786)に近い時期には紅葉山文庫に収蔵されたと推測される。また、紅葉山文庫収蔵以前には今大路家（曲直瀬家）に伝えられていたとの説があるが、その根拠となる『今大路家書目録』が紅葉山文庫蔵の和書についての「覚書」であり、今大路家の蔵書記録ではない可能性が高いことから、今大路家蔵本説については一考を要する。

(2)千葉氏の伝承について

『源平闘諍録』は14世紀半ば頃の成立と見られるが、その成立時期に近い、千葉氏の伝承を伝える資料として、『千葉妙見大縁起絵巻』(1258～1550)と『千学集抜粋』(戦国期)があるが、これらには共に『闘諍録』の伝承を改変し、後補している痕跡が見られる。また、『闘諍録』の千葉氏伝承は、江戸期の千葉氏関係資料（『妙見実録千集記』『千葉伝考記』など）との齟齬があり、江戸期における『闘諍録』の記述は「異伝」と見なされていた可能性がある。その意味では、『闘諍録』が九州に分流した肥前千葉氏に伝来したとも考えられるが、「慶安二年（1649）」の記述のある『善福寺縁起』に記載されている千葉氏伝承は『闘諍録』のそれと一致しており、『闘諍録』本文に依拠していると考えられる。『善福寺縁起』は下総相馬氏の妙見信仰を伝え、また相馬家の系譜が意識された内容であり、寛永17年（1640）以降の成立と見られる「相馬当家系図」にも近い。以上のことから、縁起制作と系図制作とが近接した場で行われ、そこに『闘諍録』が存在した可能性が生じるのであり、紅葉山文庫に収蔵される以前、寛永年間の下総相馬氏周辺に、現存『闘諍録』の存在を見出しうるのである。すなわち、『善福寺縁起』の伝承を手がかりとして、寛永年間の下総相馬氏周辺に現存『闘諍録』の存在していた可能性があることが明らかになった。

(3)『源平闘諍録』の依拠資料の問題

『源平闘諍録』の本文は、通行のテキストに比べて全体的に略述的であるが、「延慶二、三年(1309、10)」の奥書を有する延慶本を現存諸本中の最古態と見られていたこと、また現存『闘諍録』の奥書「建武四年(1337)」に若干先立つ年次であることなどから、『闘諍録』本文の成り立ちについては、延慶本的本文を先行本文と見、そこからの省略本文と見方がなされてきた。しかし、今回、『闘諍録』本文の注釈作業を通して、『闘諍録』独自の表現も随所に見られることから、延慶本的本文を省略することによって成立したとは言い難い面があり、「四部合戦状本平家物語」的な本文との関わりを想定すべき箇所も見出される。近時の延慶本研究において、現存の応永書写本には新しい部分が存在することが明らかとなり、従来の延慶本をめぐる評価の見直しが迫られているが、このことは『闘諍録』本文の成り立ちをめぐっての再検討を促すことになろう。

また、『平家物語』本文以外の依拠資料としては、『闘諍録』冒頭部分、平家の系譜を記す一節において、高望王の臣籍降下の時期を「淳和天皇の御宇、天長年中の頃」とする独自の虚構記事が「般若院系図」に由来することや、巻一下の巻頭部分の明雲関係記事においては、公卿僉議を描く一節における不合理な場面展開が、藤原兼実の日記『玉葉』の記述に由来することなどが確認された。『闘諍録』が東国において成立したことは定説化しているが、その具体的な成立の〈場〉において、作者の机辺にはどのような『平家物語』本文や資料が置かれていたのかという問題は、引き続き重要な課題である。

(4)構想および編纂意図をめぐる問題について

①『源平闘諍録』がかかえる重要な問題の一つに、その奇妙な巻立てのあり方がある。現存本５冊（巻一上・下、巻五、巻八上・下）という事実をめぐっては、いくつかの巻が散逸したとする見解と、もともと現存本のみが作られたとする見解が出されている。現存していない巻をめぐっての検証はきわめて困難であるが、現存本文における千葉常胤をめぐる独自の虚構の問題から、『闘諍録』作者の志向を明らかにした。『闘諍録』における千葉常胤は頼朝挙兵に際して重要な位置を占めているが、それは千葉氏の妙見信仰に連動している。すなわち、『闘諍録』においては、妙見菩薩を保持する常胤が常に大手の軍勢に属するという独自の構成になっている。『闘諍録』は屋島合戦以降の具体的な記述を欠いているが、常胤が義経に従軍していたとする虚構が設定されており、常胤＝妙見菩薩によって源氏方に勝利がもたらされるという独自の物語の志向が確認できる。

②頼朝挙兵譚に関して、『闘諍録』巻五の巻頭記事から、現存しない巻四を視野に入れた考察を行い、その特徴を指摘した。すなわち、『闘諍録』においては二所権現（伊豆山権現と箱根権現）が特に重視される傾向があり、二所権現は頼朝挙兵の成功を保証すべき存在として位置付けられること、二所権現以外の神社が物語における役割を果たすという他の諸本の構成を拒否する姿勢が見られるという点が明らかになった。

③巻一下において、重盛が清盛を諫言する、いわゆる「小教訓」において、『闘諍録』は醍醐天皇堕地獄説話を置くという独自の改変がなされている。清盛の運命を予告する意図といえるが、成功しているとはいえず、作者の意図のほころびが露呈されていることが確認できる。

④読み本系『平家物語』における本文流動の問題について、すでに指摘されている『闘諍録』と南都本的本文の流入の可能性を手がかりとして、本文流動の問題を検証した。

(5)本文表記・用字の問題について

『闘諍録』における独自の真名字表記および用字に関しては、注釈作業の段階において逐次確認するにとどまった。その特異性の解

明は今後に期することとし、そのための基礎資料として、本文中に読みが付された付訓語の索引を作成し、今後の研究に資することとした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
①高山利弘、『源平闘諍録』の志向、研究成果報告書（群馬大学）、査読無、2010、pp.5－16
②栃木孝惟、『源平闘諍録』〈序分〉を読む―『闘諍録』世界の探求―、研究成果報告書（群馬大学）、査読無、2010、pp.17－29
③久保　勇、『源平闘諍録』の来歴と伝承に関する一試論、研究成果報告書（群馬大学）、査読無、2010、pp.30－47
④清水由美子、『源平闘諍録』の編纂意図―頼朝挙兵に関して―、研究成果報告書（群馬大学）、査読無、2010、pp.48－59
⑤小番　達、『源平闘諍録』全訓付訓語索引稿、研究成果報告書（群馬大学）、査読無、2010、pp.108－126
⑥原田敦史、読み本系『平家物語』の流動に関する一試論―『源平闘諍録』巻八之上を窓として―、研究成果報告書（群馬大学）、査読無、2010、pp.60－69
⑦高山利弘、『源平闘諍録』における略述性、群馬大学社会情報学部研究論集、査読無、第16巻、2009、pp.165－175
⑧清水由美子、『源平闘諍録』の醍醐天皇堕地獄説話、清泉女子大学人文科学研究所紀要、査読無、第29巻、2009、pp.69－90

６．研究組織
(1)研究代表者
高山　利弘（TAKAYAMA　TOSHIHIRO）
群馬大学・社会情報学部・教授
研究者番号：７０１９７２１８

(2)研究分担者
久保　勇（KUBO　ISAMU）
千葉大学・大学院人文社会文化科学研究科・助教
研究者番号：１０３２３４３７
（Ｈ２０→Ｈ２１：連携研究者）

栃木　孝惟（TOCHIGI　YOSHITADA）
千葉大学・名誉教授
研究者番号：１０００８９５６
（Ｈ２１：連携研究者）

小番　達（KOTSUGAI　TORU）
清泉女子大学・文学部・講師
研究者番号：３０４２４３０２
（Ｈ２１：連携研究者）

清水　由美子（SHIMIZU　YUMIKO）
清泉女子大学・文学部・講師
研究者番号：４０４２４３０３
（Ｈ２１：連携研究者）

(3)研究協力者
原田　敦史（HARADA　ATSUSHI）
日本学術振興会特別研究員PD

高橋　亜紀子（TAKAHASHI　AKIKO）
白百合女子大学大学院博士課程
（Ｈ１９参加）